よだかの星を読んで

神宮前小学校　五年一組　徳渕　愛美

私は、がんと頭を打たれたかのような強いしょうげきを心に受けた。「私の名まえは私がかってにつけたのではありません。神様からくださったのです。」と、自分よりも強いたかに、はっきりと答えたよだかの気高い姿勢が、人としての在り方を教えてくれたからだ。

よだかは、その外見のみにくさと相反する名前から、冷たくされ、親切な行いさえ否定され、ついには改名か死かを要求される。私がよだかであれば、理不尽な要求は嫌々ながらも呑んでいただろうし、そこまでしてしがみついた生にも、幸せや生きる意味さえ見いだせず、暗い気持ちで生きていただろう。しかし、よだかは私とは全く違っていた。神様からいただいた名前を大事にし、理不尽な要求には応じなかったのだ。それどころか、自分の生き方と正面から向き合い、その果てに、だれの助けも借りることなく、よだかの星となったのだ。

私は、四人兄弟の長女だ。先に生まれただけで長女であって、体は妹の方が大きく、要領も妹の方が良い。好きで先に生まれたわけではないのに、しっかりしなくてはと気持ちだけが先だって、いつも空回りしてしまう、そんな自分が情けなくなる毎日だ。長女とはどうあるべきなのだろう。妹より

も小さい体、妹や弟とも上手に遊べない自分。物語を読み進めるうちに、そんな自分とよだかを少しでも似ていると感じたことが、今となってはとてもはずかしい。なぜならよだかは、どんな苦境にあっても、自分自身を見失わなかったからだ。そして、自分が命がうばわれるかもしれないというときに、自分が今までうばってきた命を想い、自分がほかの命をうばう事で生きているという事に気付くからだ。私は今までどうすればいいだろうと思い悩むばかりで、すぐ近くにあった答えに全く気付いていなかった。父と母がくれた私という存在、そして一生懸命に考えてくれた名前。それこそが、私を作る軸であり、私が一番大事にしなければいけないものなのだ。そして、そんな「私」という存在は、一人ではない。誰かが育てたお米を食べたり、母が洗濯してくれた洋服をきたり、いつも他の誰かに支えられて生きているのだ。

よだかは、自分の名前を誇り高く守り通した。また、悩みながらも自分の生き方と真しに向き合い続けた結果、名前にはじることのない、夜空にりんと光り続ける星となれたのだ。私は長女である前に、私という一人の人間なのだ。これから先悩んでしまう事も、辛く悲しいこともきっとあるだろう。しかし、今の私には「私」という宝物がある。他の誰でもない私の人生なのだ。「私」という宝物をむねに、生かされていることに感謝をし、私はよだかのように光り輝く「私」という、唯一の星になりたい。